
フェンリルの鎮

雪凱飛翔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

フエンリルの鎖

【Zコード】

Z45990

【作者名】

雪凱飛翔

【あらすじ】

今からほんの少しだけ未来の日本。

異常能力者 -ストレンジャー- と呼ばれる能力者が一般化した社会。しかしその裏では異常能力者による犯罪が多発し、持つ者と持たざる者との間には見えざる軋轢が生じていた。

地方都市、天ノ原市に住むごく普通の高校生、坂本一貴は今日も今日とて幼馴染みの花咲佳歩と共にいつも通りの日常を送っていた。そんなある日、転校生の穂群川アリスが現れ時から、一貴の日常は音を立てて壊れ始める。

アーティストである非口宣。ありふれた現代活劇。

#01 EZCOUNTER (前書き)

この作品には、残酷な描写と多數のパロディネタが含まれます。
それが苦手な方は、ご注意してお読みください。

深夜、男は闇が支配する街を走っていた。

一心不乱に前へ。とにかく前へ。

もうこれは日課のジョギングとは違つ。背後から迫る「何か」から逃れるため、ただ交互に右足と左足を出しているだけに過ぎない。

「何だよ……何なんだ、アレはよあああああああああつ……！」

١٦٦

路地が鮮血で真っ赤に染まり、その身体にはあるべきはずの頭部は鬼の形相のまま血の海に浮かんでいた。

に立つてゐる黒髪の少女。

セーラー服は返り血で染まり、右手には炎に包まれた田本刀を携え、左手で転がっている女の生首を掴むと、まだ滴り続ける赤い液体を口元に流し込む。

その姿はまるで映画の中の吸血鬼のようにおぞましくて、また浮腫も感じられた。

そう疑い、何度も頭を横に振る。

少女の瞳は獲物を見つけた狩獵者のように輝き、男を捉える。

男は直感した。この少女は自分を殺す。自分は今、決して会ってはならないモノと出会ってしまったのだ、と。

才能的に男は馬鹿にしてはいた

みすぼらしからつと、とにかく逃げて逃げて逃げ続けた。

途中、何度も立ち止まり振り返りそうになりながらも必死に思い

止めては、どれだけ息が切れようとも全速力で走り続けた。

だが、いくら毎晩のジョギングで鍛えた健脚といえ、いつかは体力と両足が限界を迎える。

パニック状態にある今の彼にはそれこそ火事場の何とやらが備わっていたかもしれないが、その分不効率な走り方は体力の消耗と足の負担を加速させてしまった。

ついに男の足は急激な痛みを訴え、男はその場に倒れこむ。

どれくらい走ったんだ？ 流石にこれくらい走ればあの少女を撒けただろう。そうだ、少し休もう。息が整つたら警察に電話だ。それから、それから……

「あれえ？ もう鬼ごっこのは終わり？」

後ろからの声に男の心臓が飛び上がる。

そして声の主を確認し、ガタガタと体中が震え上がるのを感じた。

そんな馬鹿な！ 男の全速力だぞ！ 追いつかれるはずがない。たとえ追いついたとしても、どうして息すら切らさずそこにはいるんだ！

「でも、もうそんな足じや逃げられないよね。ざんねーん」

足が止つしたって？ 足ならあるじやないか、今俺の田の前に靴

の底を見せて……

「……！？」

そこでようやく男は自分に起きた異変に気がついた。

そして同時にこれまで味わったことのない激痛がすでに失われた右足を襲う。

あまりにもの痛みに、それが斬られたものなのか、その刀に纏っている炎による火傷なのかさえも判らない。

「ぎいいやああああああああ！ 足が！ 僕の足がああああああああ！」

あまりにも痛みに、男は逃げることも忘れて膝を抱える。

だがそこには何もない。ただあるはずのない足の痛みだけがある。「おじさん、普通の人間にしてはよく逃げた方だと思うよ。だから、つい斬っちゃった。ごめんね」

と、少女が冗談めかすが、男は言い返す気力もない。

「くそつ、くそおつ……」

だが、少しでも生き延びたい。その一心から腕だけでアスファルトを這いつくばる。

おそらく頭の片隅ではもう諦めているのかもしれない。

それでも本能が男を突き動かす。

一步でも前へ、前へ。生きるために！

「あはははは！ おじさんもしぶといねー」

そんな様を少女はまるで虫ケラでも見るように嘲笑いながら、刀を逆手に持ち、今まさに遠ざかろうともがく背中に向け刃を向ける。

「だったら、すぐに死ねるよう心臓を一突きにしてあげる」

そんな死刑宣告の後、そのまま刃を男の背中に突き立てる少女。

男は「ぐえつ」と蛙のような短い悲鳴をあげ、ピクリとも動かなくなつた。

まるで昆虫採集のピンで張り付けにされた男の死体を、少女は顔に笑みを浮かべながら見下ろし、刺さったままの刀を抜く。

その瞬間に傷口から「ポツ」と血液が溢れ出し、この場も赤い血の

海へと変化させる。

そして炎を消して鞘に収めると、既に意識のない男に語りかけた。
「怨むなら、アタシと出合つちやつた自分の運のなさを怨んでよ。

それじゃあね」

もちろん男に返事はない。すでに事切れているのだから。

それを確認して少女は踵を返し、再び夜の街へと消えていった。
この2人の惨殺死体が見つかったのは、それから数時間後のこと
であった。

フェンリルの鎖

#01『ENCOUNTER』

その日は朝の日差しで目が覚めた。

まだ眠いと訴える目を擦りながら時計を見ると、ちょうど7時を
指した辺り。目覚ましが鳴るにはあと20分も余裕がある。

原因はおそらくこれだろう。と、俺は半開きになっているカーテ
ンを全開にし、窓を開け放つた。

気持ちがいいくらい快晴だ。五月晴れとは時期的にもまさしくこ
のこと。これでは体の方が早く起きろと命じるのも頷ける。

ただ1つだけ注文をつけるとしたら、もう少し空氣を読んでいた
だけないだろうか。

特にゴールデンウイークの休み気分が抜け切らず、深夜までゲー
ムをやつていた翌朝の月曜なんて、頼むからあと1時間は寝かせて
欲しいものだ。

まあ、そんなことでは確実に遅刻するのだけれど。

そうやって寝ぼけた頭で昨日の自分を怨みながら、洗いたてのカ
ッターシャツに袖を通す。

それと同時に、頭がすつきりするのを感じた。

うん。やはり時間をかけてでもアイロンはかけておくものだ。昨
日を引きずっていた自分をリセットし、新しい自分になつたような

気持ちになつてくる。

せつかくだから今日は久々にしつかりと朝食でも作るうか。

そう思いながら着替え終わつた俺は2階の自室から1階へと降りていつた。

それから諸々の身支度を整え、いざ冷蔵庫を開ける。

そこにあつたのは消費期限が昨日の牛乳と、同じく賞味期限が3日程過ぎたハムと、これまた賞味期限を7日オーバーした卵が2つ。

「……うん、まだ大丈夫だよな、きっと」

牛乳は1日過ぎただけだ。まだ焦るような時間帯じゃない。

ハムは元々保存食だし防腐剤だつて入つてゐる。匂いも大丈夫そうだし問題はないはずだ。

卵に至つては生で食べられるのがこの期限までであり、火を通してまだ食べてもいい。

なんだ、何も問題ないじゃないか。何も……

「まつ、こいつらはハムエッグにして、あとマーブルフレークがあつたからそれでいいか。それにしても、もう少し何かあるかと思ったんだけどなあ」

などと呑きつつ、他にもそろそろヤバそうな食材を調理していく。今朝のメニューはシリアルとハムエッグ、そこにレタスと玉ねぎのサラダとボイルしたウインナー。

朝にしては少々ボリュームがあるが、俺にはちょっとした秘策があつた。

ちょうどそんな時、玄関から来客を示す呼び鈴が鳴る。

「おっ、そういうやもうアソツが来る時間か。ちょうどいい所に來てくれたな」

俺はニヤリとテーブルの向かい合わせの席を見る。

そこには今作つたメニューとまつたく同じ朝食が用意してあつた。

そう、賞味期限がほんのちょっとだけ過ぎて捨てられるのを待つていた食材達の、一生に一度の晴れ舞台。それを俺だけで楽しむのは勿体ない。そう思つだらう?

それにアイツが腹の調子が悪くなつたという所をこれまで見たこともない。きっとこの子達だって、べろりと何事もなく平らげてくれるさ。

「おーい、カズくーん！ 起きてるーー！」

と、なかなか返事がないのを不思議に思つてか、玄関先から少女の声が聞こえてくる。

俺は慌てずインターフォンを取り、平静を装いながらこつ返した。
「よお、佳歩。おはよう。今鍵開けるからちょっと待つてくれ」
それだけ言うとインターフォンを置き、玄関の鍵を開けると、元気よく一人の少女が扉を開けて入つてくる。

「おはよっ。今日はちゃんと起きたみたいだね」

セーラー服に身を包み、栗色の髪を肩辺りまで伸ばした童顔の少女は、俺の格好を見るなりそう挨拶を交わしてくれた。

彼女は花咲佳歩。はなざきかほ俺の家のお隣さんで昔から付き合ひのある、いわゆる幼馴染みと言うか、腐れ縁のよつ存在だ。

「いやつて俺の生存と起床を確認するのが日課であり、さつき言つていた『アイツ』もある。

チャームポイントはなんといつてもクリツとした大きな瞳だらう。背丈はあまり大きい方ではなく最近成長も止まつてしまつたようだが、代わりにある一部分だけがご立派に成長しているのが小さな自慢と悩みであり、逆に伸び悩む背は大きなコンプレックスでもあるそうだ。

そのせいか、2つ3つ年下に見られるのはいつものことだ、去年くらいまでは子供料金で通れたところもあるそつだ。
もつとも最近ではその胸の大きさからして小学生とは思われなくなつたらしいが。

「まあな。そういうや今から朝食だけど、佳歩も食うか？」

「え、本当ー？ 朝、」はんは食べてきたんだけど、ちょっと物足らなくてさー

それから最大の特徴と言えば、その食欲に及ぶるだらう。

その量たるや一般的な高校男子である俺の3倍は食べる。恐らくその気なら3倍と言わず5倍、10倍は食べそうな勢いだ。

しかしそれでも佳歩からはダイエットだの、体重が増えただの泣き言を聞かないのは、単に彼女の努力の賜物なのか、それとも全ての栄養分は胸の大きな膨らみに回っているのか。

ああ、神様。願わくは彼女のコンプレックスとは裏腹に、そのままの成長率を維持してください。

「……今、カズくん変なこと考えなかつた？ なんだか悪寒が走つた気がするんだけど」

「いいや、まつたく。天地神明に誓つて。それより早く食わないと冷めちまうぞ」

「あ、そうだつた！ 『じつはん～ じつはん～』」

奇怪な即興ソングを歌いながら佳歩はダイニングへと上機嫌で向かっていく。

ふふふ、おいしく一度目の朝食を食べた後に、「実はすべて賞味期限切れの食材でした」とドッキリのネタ晴らしをした時、一体この童顔の少女はどんな反応をするのだろうか。考えただけで少し顔がニヤけて引きつってしまう。

だが駄目だ。まだ笑うな俺。アイツは抜けているようで委員長を任されるくらいにはしっかりしているし、これだけ長い付き合いとなると些細な違いからでも何やら勘付かれるかもしれない。

平常心だ、平常心。クールになれ、クールになるんだ、坂本一貴

……！

そうして朝食は始まった。

佳歩は「わー、まるでホテルの朝食みたい！」とはしゃいで、次々に目の前の料理に手を付けていく。

この程度でホテルの朝食とはかなりの過大評価だが、朝は家族の好みからいつも和食である佳歩からすれば、洋食の朝食＝ホテルの朝食という方程式が成り立っているのだろう。

一方俺はネタバレを知つてしまつていてるせいか、恐る恐る少しづ

つ口にし、味を確かめながら食べ進める。

それにしても、「イイツは本当においしそうに食べるな。

なんだか真実を告げるのが酷なような気がしてきたぞ。

「ん？ カズくん、もう食べないの？」

と、すでにあらかた平らげてしまつた佳歩が、何か物欲しげな表情でこちらを見つめる。

いや、正確には俺の皿か。確かにまだ半分くらいしか手をつけておらず、こいつのペースとしては遅い方だろう。

それに警戒して何度も咀嚼してしまつたためか、少し満足感も覚えつつある。

正直言つと朝だからこれくらいで十分だ。足りなければ昼食の他にカーリーメイトでも買って腹を満たせばいい。

「ああ、ちょっと早起きしたからつて調子に乗つて作り過ぎたみたいだな。……よかつたら食つが？」

「うんっ！」

待つてましたと言わんばかりに、俺の食器へと手を伸ばす佳歩。本当にコイツは食つてる時が一番幸せなんだうな。

すまない佳歩よ、貶めようとした憐れな俺を笑つてくれ。

「悪いな、佳歩」

「ん、何が？ むしろこいつちがお礼を言いたいといひなんだけど」「いや、なんでもないよ。忘れてくれ」

これで一応の謝罪はしだろう。内心で胸を撫で下ろしながら、食べかけのコーンフレークにスプーンを落とす佳歩を何気なく見る。あれ、今気づいたがこれつて……

いやいやいやいやいや！

俺は一体何を考えているんだ。佳歩との仲は兄妹みたいなものじやないか！

それを今更そんな目で見るなんて、俺は腐つている！ 腐りきつている！

ええい、卑猥な俺よ、俺の中から立ち去れ！

だけど夜にはこっそり戻つて来い……つて、何を馬鹿なことを考
えているんだ！

絶望した！ 欲望だらけのこんな俺に絶望した！

「ねえ、そういうえばさ。かんせ……」

ドキリと心臓が脈打つ。それはこれ以上先の単語を言われたら、爆発しそうになるんじゃないかといふくらいで、胸を締め付けるような痛みにも似ていた。

「完成したんだってね、駅前のドーナツシヨップ」

そして一気にクールダウン。そりやあもう、遊園地とかにある氷点下40°の世界に入った時くらいに、サアーッと汗が引くような感じで。

「そうだったな。今日の放課後にも行くか？」

「あ、今日は委員会の会議があるから少し遅くなるけど……」

「いいよ、それくらい。どうせ暇なんだから待つといてやるよ」

「ありがとう！ できればオゴッてもらえたらうれしいかなー」

「調子に乗るなっ」

そう言つて俺は軽くチョップを見舞うと、佳歩は可愛げに舌を出した。その仕草は彼女の見た目も相まって、さらに幼そうな印象を与える。

そんなんだから子供に見られるんだぞ、と言つてやりたい所だが、そこまで言つと佳歩が本気で不機嫌になりかねないのでこの辺でやめておこう。

『次のニュースです。昨夜未明××県天ノ原市あまのはら市において、連続して2人の市民が命を落とすという残忍な事件が起こりました』と、垂れ流しにしていたテレビのニュースから、俺達の住んでいる街での殺人事件が報道される。

それには談笑していた俺も佳歩もピタリと話し止め、食い入るようテレビ画面に注目していた。

『亡くなったのは男性と女性の2人で、日本刀のような刃物で斬られた後に遺体を燃やされており、現在警察が身元の確認をしており

ます。また一連の異常能力者による連續焼殺事件との関連性も示唆され……』

異常能力者。別名をストレンジャー。5年前に突如として現れ始めた、人にあらざる能力を持つた人間達。

その種類は炎や雷を自在に操るもの、空を飛ぶもの、体の一部を変異せるものなど様々で、また誰もが例に漏れず超人的な身体能力を得る。

現にこの5年でスポーツ界の記録はすべてこの異常能力者によつて塗り替えられ、非能力者とは別に競技すべしとの声も出ているほどだ。

『それでは次のニュースです』

気がつくと、俺はそのニュースが終わつてもテレビ画面を見つめ、奥歯を強く噛み締めていた。

一体、この犯人はどんなクソ野郎なんだ。ただ斬り殺しただけじや飽き足らず、その遺体を燃やすなんて、どれだけ死者を冒涜するつもりだ。

やり場のない怒り拳が震え、自分でも表情が険しくなるのを感じる。

「カズくん、そろそろ出ないと学校遅れるよ?」

そう声を掛けられて、やつと我に返つてテレビから田を離す。

その方を見ると、何か心配そうな田をした佳歩がじつとこちらを見つめていた。

「あ、ああ……。早起きしたつてのに、遅刻しちゃ元も子もないな」

「うん、そうだね。あ、カズくん、おじさんとおばさんに挨拶は?」「おつと、忘れてた。先に行つてくれ」

「いいよ、玄関で待つてるから」

そう言い残し、俺は奥の和室へと向かう。

ふすまを開けた途端、畳特有の香りが出迎える。

そこには2人の男女が仲睦まじく並んで写っている写真と、両脇に挟むように置かれた2つの位牌が鎮座していた。

そう、この写真の2人が俺の両親。

2年半前のクリスマスイブ。結婚20周年だからと、俺と姉さんが送った旅行の飛行機が墜落し、命を落とした。

この写真も旅行先で撮ったものらしく、運よく回収できたスーツケースの中のカメラに残されていたものだ。

墜落は海の上だったこともあり、遺体はまだ見つかっていない。むしろ遺留品があつただけでも俺達は幸せな方だろう。それほどに痛ましい事件だったのだから。

「じゃあ行つてくるよ、父さん、母さん」

遺影に手を合わせ、いつもと変わらず微笑む2人に、息子もいつもと変わりないことを報告する。

時々今日みたいに忘れてたり、急いでいてスルーしたりすることもあるけども、これが俺の日課の1つである。

うん、佳歩が教えてくれたおかげで少し落ち着けた。そうでなければモヤモヤした気分のまま今日を過ごしていたところだ。

幼馴染みに感謝しつつ、俺は和室を後にして玄関へと向かう。

「わりい、待たせたな」。

「いいつて、いいつて。じゃあ行きますか」

「おう」

と、靴を履き家から出ようとした時だった。

突然、俺は悪寒に襲われその場に凍りつく。

「どしたの、カズくん？」

佳歩が心配そうにこちらを見つめる。

ああ、コイツは間違いない。この感覚は……

「佳歩、やっぱり先に行つてくれ」

「え、なんで？ なんだか顔色も悪いし、大丈夫……？」

「ちょっと忘れ物を思い出した。すぐ追いつくと思うから」

いいから早く行け！ もうアイツがすぐそこまで迫ってきてるん

だぞ！

内心俺は焦りながら佳歩の背中を押し、少し追いつくような形で

玄関の外へと押し出す。

「わかつた、わかつたから。じゃあ先に行つてるよ。ちやんと遅刻せず来てよね」

「ああ、無論だ。じゃ、後で」

言い終わるか終わらないかの内に扉を閉め、俺は後ろに向き直る。さあ、待たせたな。早速始めよつじやないか。

俺とお前、どっちが速いか……命を賭けた、勝負つてやつを……！
十足のまま廊下に駆け上がつた俺は、一目散にある一点を田指す。そこにはこの家の中で最も好んで近づかない、言わば不浄の場所。またの名をウォーターコローゼット……つまりトイレである。

「うおおおおおおおおおおおおお……！」

何がいけなかつたんだ。卵か？ ハムか？ 牛乳か？ それとも萎れかけたレタスか？

「どうか、俺より食つたはずの佳歩はなんであんなにピンピンとしてるんだよ！？」

洋式の便座に腰掛け、真っ白に燃え尽きたボクサーのよつた状態で、己の愚かさを恨む。

きつと幼馴染みをちょっととした腰にかけよつとか思つた、そんな浅ましさが一番いけなかつたのだ。

それと今度から食材の賞味期限は守ろ。といふか、牛乳なんて消費期限じゃないか。

賞味はおいしく食べられる期限。消費はそれまでに食べらざるといけない期限。こんな豆知識、今の時代小学生でも知つていろといふのに……

起こしにきてくれた佳歩の手前、学校に遅れる訳にはいかない。俺はトイレから出ると薬箱に入つていた整腸薬やら下痢止めの薬を飲むと、急いで彼女の背中を追いかけることにした。

結局どうにかこうにか学校には遅れずにすんだ。

途中で何度もヤツが真後ろまで迫ってきたが、滑り込みで補給ボイントに駆け込めたため、なんとかこの席に落ち着けているのが現状である。

「よお、一貴。聞いたか？」

と、俺の登校を確認して、髪を茶色に染めピアスをつけた、いわゆる健康優良不良少年が一人近寄ってくる。

「何をだ？」

「転校生だよ、てんこーセー。俺らのクラスに来るらしいぜ。それも女だつて話だ」

「相変わらず賢治は、じついう話題だと耳が早いな」

「何言つてんの、お前が遅すぎるんだって。もう2年の間じゃこの話題で持ちきりだぜ」

このいかにも悪友Aといった印象の男は後藤賢治(ごとうけんじ)。通称「ゴトケン」。もつともあまりそう呼ぶ人はおらず、自称のあだ名だ。

おそらく俺の知っている中では、天ノ原高等学校2年随一の情報通である。

賢治とは中学1年からたまたまクラスが同じで、中学3年の頃にそれに気づいて話すようになつたという、長いような短いようなよくわからない付き合いだ。

「そういや、一貴の後ろの席空いてるし、そこに座るんじゃねえか？」（）「いっつ、漫画の主人公ポジションじゃねえか、このこのお

そう言いながら肘で肩の辺りを小突く賢治。
ぶつちやけ少し鬱陶しい。

「別に。たまたまだる、こんなの」

「一貴い……テメエってヤツは！」

今度は後ろに回りチョークスリーパー。

もう鬱陶しいを通り越して暑苦しいし邪魔だ。

「ああ、もう！ 離れる、賢治！ 男に抱きつかれたくない！」

「だったらこの席を俺に譲れ！ 今だ！ 今すぐにだ！」

「おーい、坂本、後藤。何を暴れてる。ホームルームはじめると、そんな時だ。救いの女神……もとい女神、担任の都築教諭の声が耳に届く。

時計を見ればまだホームルームが始まるよつた時間ではない。なるほど、どうやら賢治の情報は本当だつたらしい。こんな時間に始めるといつことだから、何やら時間がかかりそうなこと……つまりは転校生の紹介があるのであつ。

その証拠に周りの教室からはまだざわめきのような声が聞こえていた。

「さあて、みんなも噂で聞いたと思うが、今日から転校生が来るぞ。早速紹介したいところだが、ちょっと待つてろ」

と、都築教諭は教室の扉をガラツと開ける。

それから息を大きく吸い込み……

「テメエらー！ さつさと自分の教室に戻りやがれ！ 成績落とすぞ、ゴラアー！」

とても教師どころか女性とも思えないドスの聞いた声で、転校生に群がつていたのであらう別クラスの生徒達を一喝した。

「こ、怖え……」

しんと静まり返つた室内で、賢治がぼそりと全員の気持ちを代弁する。

この都築春菜つづき・はるなという教師は名前の可憐さとは打つて変わり、昔はレディースの頭という異色の経歴の持ち主だ。

まあ、何故彼女が教師になつたかといつ3年B組金 先生的エピソードについてはまた機会がある時に語るとして、その都築教諭が蜘蛛の子を散らした後、1人の女子がその後ろについて教室へと入つてくる。

それと同時に誰ともなく「おつ」と反応し、それが機転となつてにわかにクラス内がざわつき始める。

まあそれも無理もない。女子の転校生だとは聞いていたが、誰もここまでの逸材が来るとは思つていなかつただろう。

ポニー テールの要領でまとめた黒髪は腰の高さまで伸び、すりつとした長い手足と、不必要に細すぎない腰回り。

胸の辺りは少し寂しいが、全体のバランスを考えればむしろそれが正解と言わんばかりのモデル体型であった。

そして誰もがぱっと目を奪われたのはその容姿だらう。この学年でもおそらくはトップクラスの花咲佳歩とは対照的に、落ち着いた大人の女性を思わせるような雰囲気。

いや、見た目より幼く見られる佳歩と比較するまでもなく、同年代の女子と比べて遙かに大人びている。クールビューティーとの称号がこれほどしっくりくる高校生といつのもナシそういうのはいはずだ。

「おい、静かにじる男子ー。それじゃ 穂群川、自己紹介な」

「あ、はい」

都築教諭に促され、チョークを手に黒板へ自分の名前を書く転校生。

その姿を見て、彼女の立ち姿の綺麗さに驚かされる。

背筋がぴんと伸びて、まったくフレがない。着物を着せればかなり似合つだらうと思わずにはいられない。

ところで佳歩さんや、どうして何か頬張つたままこちらを見ているのでしょうか？

ははん、まさか都築教諭にバレないようパンか何かでも食べてるんだな。朝にあれだけ食べたのに、まったく仕方のないヤツめ。

「…………穂群川アリスです。よろしくお願ひします」

ペニーリと頭を下げ、控え目な挨拶をする転校生改め穂群川さん。

その声は小さく周りの喧騒に押されがちで、どこかこの異様な状況に緊張しているようでもあった。

「じゃあ穂群川の席は…………おめでとう、坂本。お前の後ろだ」

あ、やつぱりですか。ああ、なんだか周りからの視線が急に痛くなつてきたのは気のせいでしょうか。

『うらやましいぜ……』

『くそつ、幼馴染みだけじゃ足りないってのかよ……』

『坂本爆発しろ……』

『どうやら氣のせいじゃないみたい。助けてドラ モーん！』

『さてと、まだ時間はあることだ。何か穂群川に質問あるヤツ』

『はい！ はい！ はーい！』

眞つ先に手を挙げ主張したのは吉川までもなく賢治であった。片手にはペン。もう片手にメモ帳と、一昔前の新聞記者を思わせるようなスタイルで、いつの間にやら最前列で待ち構えている。「じゃあ後藤……」

「よしひ

「以外のヤツいないかー？」

「ちよ、都築先生、それはないツスよー！」

『どつと、クラス内が笑いに包まれる。』

なるほど、今のは穂群川さんをリラックスさせるために都築教諭と賢治が仕組んだ即興のコントか。

その証拠に穂群川さんも笑つて……

「あ、あれ？」

『いなかつた。』

『まつたく、これっぽちも、クスリともしていなかつた。』

『そりやあ賢治が素つ頓狂な声をあげてしまつのも無理はない』ことだ。

『これは中々の強敵だぞ。さあ賢治、どう立ち向かう？』

『あー、えー、そうだな。穂群川、何か趣味とかないか？』

『そこに空氣が凍りついたのを気にしてか、都築教諭が助け舟を出す。』

「ありません」

『だが即効シャツアウト。』

『こりやあクールビューティーならぬ、アイスピューティーだったか。』

『あ、じゃあ前の学校ではどここの部活だったのか？』

今度は賢治が氷の美少女へと挑みかかる。

「部活動はやつていませんでした」

「じゃ、じゃあ好きなテレビ番組とかは?」

「ニュース番組以外見ません」

「そ、それじゃあ前の学校でのあだ名とか?」

「特にありません」

「家族構成とかどうよ?」

「答える必要はありますか?」

「す、スリーサイズは?」

「答えたくありません」

「えーと、えーと……」

賢治、もういい! お前の勇気と努力はわかつた。だからもう帰つて來い。見ているこっちが切なくなつてくる……

「あの、もうよろしいですか?」

「あつ……はい……どうぞお席にお戻りください」

意氣消沈し、思わず敬語になつた賢治が肩を落としながら自分の席に帰つてくる。

可哀相に。おそらく今の時間は「魔の数分間」として彼の人生に、非常に大きなトラウマとなつて永遠に残り続けるだろう。

つて、他人事にしている場合じゃなかつた!

この質問者殺しのアイスビューティーは俺の真後ろの席に座るじゃないか!

丸つきり無視するつて訳にもいかないし、かと言つて無理して話しかければ賢治の一の舞だ。

何故だろう、さつきまで嫉妬と羨望で針のむしろにされていたはずなのに、今は同情と憐みしか感じないぞ。

『可哀相に……』

『大丈夫かな、坂本……』

『さつきは爆発しろとか、正直スマンかつた』
うわあああん! やっぱり助けてよ、ドラ もーん!

そう考えている間にも穂群川アリスは一步一步近づいてくる。

さつきまでザワザワと続いていた喧騒はここに来て、ざわ…ざわ…と、まったく別の意味でざわつき始めていた。

くそつ……何が漫画の主人公だつ……！

これではまるで人身御供つ……！ スケープゴートつ……！

だが何があるはずだつ……！

彼女と上手く付き合える、唯一の正解ルートがつ……！ いわば圧倒的僥倖つ……！

顎と鼻が鋭角的になりそうな程悩む俺。そんなことは知る由もない穂群川は、颯爽と机と机の間を抜け、その真横を通り過ぎようとしていた。

流石に俺も男の子だ。ふと意識してしまい、こつそりと彼女の方に視線を向ける。

もちろんバレないよう、チラリとほんの少しだけだ。ここで気付かれたりしたら、どんな第一印象を持たれるか分かつものじやない。

うん、この近さで見てみると更に彼女の綺麗さに驚かされる。

この場合、可愛いという言葉は逆に失礼にあたるのではないだろうかと邪推するほどに肌も白く、目元や口元もまるで人形のように整っている。

その時、俺は自分でも気付かない内に彼女に見惚れていて、こつそりと見るつもりが完全に目で追つてしまっていた。

その視線に気付いたのだろう、穂群川も俺に視線を向け、完全に目が合つてしまつ。

しまつた！ そう思つて視線を外そつとするが、一瞬で思いとどまり、頭の中で何人もの小人が緊急会議のため招集される。

ここで目を逸らした方が印象悪くないか？

だからと言つてジロジロ見るのも失礼だ。

だつたら愛想笑いでもしてみるか？

それよりも何か声をかけた方がいいのでは？

ありがとう、見事に意見がバラバラだ。とても参考になつたよ。
こんな時、彼女の方から話しかけてくれれば気まずくならないで
済むのだが……

「よひしぐね、坂本くん」

今、何が起つたんだ。

おそらく教室中が俺と同じ考えだ。

状況を整理すると、後藤賢治同級生や都築春菜教諭の質問を半ば拒否するよつに答えたこの氷の美少女は、坂本一貴というジロジロと嘗め回すよつにガンをつけた男に、フレンドリーに微笑み返した。時間としてはほんの2秒にも満たない時間のこと。だがそれは、このクラスにいる全員を驚かせ、そして評価を一転させるに十分な時間だつた。

「うおおおおおおお！　シンデレキタ————！」

「いや、違う。これはクーデレでござるよ！」

「駄目だ、2人共。全然駄目だ。今のは素直クール。つまり穂群川さんはちゃんと質問に答えていたつもりが、結果として冷たい印象になつたに過ぎないんだ！」

「いいんだよ、こまけえことは！　それより坂本、お前いつフラグ立てやがつた！　あれか、遅刻しそうになつてどつかの曲がり角で食パンえた穂群川さんとぶつかつたか！　何色だつたんだ、コンチクショーン！」

「そんなこと俺が訊きたい。言つておくが彼女とは初対面だ。もしかしたら通学路ですれ違つた可能性は否定できないが、急いでたから誰とすれ違つたなんていちいち覚えていなつての

あちこちから人が俺と穂群川さんを囲むように集まり、もうこれ
はちょっとしたお祭り騒ぎだ。というか何だこの変わり身の術は。

全員忍者アカデミーでも通ったのか？

……まあ、かく言う俺も他人のことを言えた義理ではないのだが。
「ちょっと、みんな静かにして！ 隣のクラスに迷惑でしょ」

そんな中、佳歩は委員長としての責務を全うしようと奮闘するが、
一度火がついた導火線は止まらない。

「あの、みなさん落ち着いて……」

ついには穂群川さんまでもが止めようとすると、それが逆に火に
油を注ぐ。

「や、やべえ……今みたいな声を、ウイスパーボイスって言つんだ
よな。もつかい言つてみて」

「だから、みなさん落ち着いてください……」

「くううう……！ 見た目だけじゃなくて声まで綺麗とは！」

「俺、このクラスになれてよかつたよ。穂群川かわいいよ穂群川」
駄目だこりや。もうやだこのクラス。

しかし、そんなことは言つていられない。前を見れば元レディー
スの都築教諭が苦虫を噛み潰し、ついでに何人か殺っちゃつたこと
のあるような目で禁煙パイポを咥えている。

これはそろそろ雷が落ちる頃だ。いや嵐が来るかもしれない。

とは言え、この騒動には俺にも責任の一端がある。穂群川さんは
単に目が合つた俺に律儀に挨拶をしてくれただけで、そもそも俺が
スケベ心を出さなければこんなことにならずに済んだのだから。

そして俺は意を決し立ち上がり、穂群川さんの腕を握る。

「先生、穂群川さんの調子が悪いみたいなので、保健室に案内して
きます」

「おー、わかった。頼むぞ坂本」

どうやら俺の意が通じたらしく、都築教諭は「早く行け」と言わ
んばかりに顎でくいっとサインを送る。

「何つ！？ 坂本、その役目は俺が……」

と、この混乱に乗じて、取り巻きの内の1人が強引に穂群川さんの腕を掴もうと手を伸ばす。

パシッ！

しかしその手をはたく乾いた音。

「あ、ごめん。斎藤くん。手、当たっちゃたみたい」
佳歩である。見ると右手はすべてを切り裂くエクスカリバーのごとく、指がピンと伸び手刀の構えを取っている。

ちなみにその一撃を喰らった斎藤は腕を押さえその場にうずくまつっていた。

そして佳歩も「ここは私に任せて」と言わんばかりにアイコンタクトを送る。

了解だ。坂本一貴、これより状況を開始する。

「さ、行こう、穂群川さん」

「え、ええと……」

流石に具合も悪くないのに保健室に行くことには抵抗があるのか、

どこか困惑した様子で周りをキヨロキヨロと見る穂群川さん。

「いけない、心拍数が下がって体温も低い。これは急がないと」

「は、はい？」

「くっ、意識も朦朧としてきたみたいだ。これじゃ歩くのは無理やうだ」

「あ、あの……きもつー」

何か言いかけよつとする穂群川さんを勢いだけの三文芝居で制し、お姫様抱っこの要領で抱きかかえる。

やつぱり思つた以上に軽い。それに体の線も細くて強く抱くと折れてしまいそうだ。

あと髪の手入れにもかなり気を使つてゐるのだろう。こんなに長い髪なのに痛んだ様子は見られず、それからい匂いもする……

おつと役得に浸つてゐる場合ではなかつた。早くここから脱出し、

この場を2人に収めてもらわねば。

「それじゃあ行くよ、穂群川さん。しつかり捕まつて」

「あ、はい……」

穂群川さんが俺の肩に手を回し、更に2人の距離が密着する。

ああ、俺生きていられるかな……

「佳歩、今日は夕飯にステーキとパインサラダ作つてやるからな」

「それ死亡フラグだよー！」

そして怯えた目でこちらを見る穂群川さんを抱えて、俺は一目散に走り出した。

「はあ……はあ……」ここまで来れば、とりあえず大丈夫だろ？「

穂群川さんをお姫様抱っこした俺は、保健室には行かず渡り廊下の先の旧校舎へと向かった。

「ここには机や椅子を保管してあるだけの使われていない教室がいくつもある。

その中の1つの部屋に入り穂群川さんを降ろすと、一息つくため椅子に腰掛けた。

「あの……保健室に行くのでは？」

と、どこか怯えた様子で穂群川さんがそう尋ねる。

そもそもそうだ。いきなり会つて間もない男子に誰もいない部屋に連れ込まれるのだ。どう考えても怪しい状況である。

なるべく彼女の不信感を煽らないよう、俺はここに連れてきた理由を話すことにした。

「ああ……」うでもしなきや、都築先生がブチ切れでもしないと收拾がつかなかつたからな。そうなると確実に1限目は潰れちまつ

「は、はあ……私、何か迷惑でしたか？」

「とんでもない。穂群川さんこそ、アイツらに詰め寄られて迷惑だつたる？」

「……？」

なんだかよく分からないとでも言つた感じで、穂群川さんは首を傾げる。

もしかして……いや、もしかしなくてもこの人つて……相当抜けてる？

思わずそんな失礼な考えが頭をよぎるが、ここは気にしないことにしよう。

「むしろ私の方こそ、みなさんに迷惑をかけていたのかと」

「ないない。アイツらが勝手に騒いでただけなんだから、穂群川さんが気に病む必要なんてどこにもないって」

「そう……ですか」

どこかまだ納得いかない様子で頷く穂群川さん。

「どうか、あの状況を自分の所為と思えるなんて、どれだけいい人なんだ。むしろ被害者は彼女の方だったと言うのに。」

「まあ、みんなも悪ノリしちまつただけで悪気はないんだと思つ。あんまり嫌わないでやってくれ」

「そんな……嫌うも何も、私の方こそもつと気が利けば……やつぱりあんな感じじゃ印象最悪……ですよね……？」

そう言って「はあ……」と一つ、ため息を漏らす。

おそらく自己紹介の時とその後の質問のことを感じ病んでいるのだろうが。

だとすれば、それはとんでもない勘違いだ。

「いや、むしろ逆に働いたと思うな」

「……？　どうこうことですか？」

「んー……なんて説明すればいいかな……」

そのままを言えば「ギャップ萌え」で落ち着くのだが、もう少しうまく説明できる言葉が浮ばず少し頭を捻る。

「なんていうか、イメージと違つたって感じかな」

「イメージ……ですか？」

「ああ。最初はもつと近寄りがたい感じだつたけど、意外と素直で

話しかけやすいんじゃないかなってね

「あ……ありがとうございます」

「い、いえ、どういたしまして」

何故かお礼を言われ、俺も思わず頭を下げてしまつ。

どうやら少しさは彼女の警戒心も薄れてきたみたいだ。それに1限

目の鐘が鳴りそうだ。

「じゃ、もうそろ教室に戻るつか。わざよつは落ち着いてると思

うし」

「あ、あの……」

「ん?」

と、扉に手をかけ外に出よつとする俺を呼び止める穂群川さんの

声。

足を止めながら向こう直ると、穂群川さんが何かを言いたげな表

情でこちらを見ていた。

かと思えば、何かを躊躇して俯き、もう一度こちらを向こう直る。

「その……よければですけど、お友達に……なりませんか?」

「へつ……?」

意外過ぎる展開に俺は思わずそう訊き返す。

だつていつフラグ立てたんだ!?. わづままで警戒されてたつて

言つのに……

「あの……やつぱり駄目……ですか?」

「い、いや、全然! むしろこちらお願いしたいくらうだよ!..」

「そ、そなんだ……」

少し熱が入つてしまつただろうか。穂群川さんが一步後ずさり、距離が空いてしまう。

「もちろん! あ、そうだ。ケータイ番号交換しない?.

だがこの浮かれきつたイカレポンチはそんなことお構いなく、その一歩を詰めて行く。

「あ、ごめんなさい。携帯電話、持つてなくて……」

「あ……そなんだ……」

ほら見ろ、あからさまに拒否されたじゃないか。

馬鹿、俺の馬鹿！ せっかくのチャンスなのに焦つて何とこうく
マを……

「でも、差し支えなかつたら教えてください。その内購入するかも
マを……」

しかしそまだ望みが潰えた訳ではないようだ。

「え、うん。わかつた。ちょっとメモするから待つて」

一瞬彼女の反応に戸惑いはしたもの、向こうから言い出してく
れたのを断る理由もない。俺は学生手帳からページを切り取り、ケ
ータイの番号をそこに書き写そうとする。

が、よく考えれば筆記用具は教室だ。これじゃつづく格好がつ
かない。

「あ、そうですよね。これどうだ」

どこまで出来た娘だろ？ が、穂群川さんがどこからともなくボー
ルペンを取り出す。

「そういえばまだお名前、聞いてませんよね？」

「そうだけ。じゃあ……これでよし」

ケータイ番号と一緒に自分の名前も書き記し、その紙を手渡す。

「俺、坂本一貴。コンゴトモヨロシク……」

「はい、じちらこん。お願ひします」

某悪魔合体風挨拶をスルーし、普通に応対する穂群川さん。どう
やら今のネタはスベつたらしい。通じたら通じたで少し困るが……
まあそれはともかく、これで晴れて俺は彼女の「友人となれた訳
だ」。

これはクラスメイトの男子共にバレたらなんと言われることがやう。

「では、教室に戻りましょ」

「そうしよう。不必要に遅くなつて、またアイシーラに騒がれたらた
まつたもんじやない」

そしてチャイムが鳴りきる前に教室へと戻り、各々の席に着く。
そこではまるでお通夜のような静けさが俺達を待ち受けていた。

もう何も訊くまい。

こうして大きな波乱も起きないまま一日が過ぎ、この日の授業はすべて終わるまでは、比較的穏やかな天ノ原高校2年1組であった。

「とまあ、大体こんな感じだつた訳さ」

「なるほどねー。2人が妙に仲良くなつたと思つたら、そんな理由があつたんだ」

学校帰りの住宅街。約束のドーナツ・ショッブに寄つた後、俺と佳歩の話題は言つまでもなく転校生、穂群川アリスのことが中心であつた。

ただどちらかと言えば、俺と穂群川さんが空き教室に逃げ込んでいる間、佳歩達がいかにして追いかけようとする男子達を止めつつ、事態を收拾させようとしていたかを延々と愚痴られていたような気もするが。

その流れで「一方その頃の2人は……」という感じで話を振られたという次第である。

ちなみに抑止力の効果は放課後までだつたようで、5限の授業が終わると同時にクラス内はおろか、別のクラスからも野次馬達がぞろぞろとやってくる始末。

本当は穂群川さんも連れて親交を深めるため3人で行きたかったのだが、残念ながら本人は延々と続くであろう質問責めの真っ只中である。

さつきから賢治からの実況メールがひっきりなしに着信されるのが何よりの証拠だ。

よかつたな賢治。トラウマが1日も経たずに解消できて。

「そういえば、カズくん達がいない間にケンちゃんと話してたんだけど」

「賢治とか？ アイツ本当に立ち直つたんだな」

「それはわたしもびっくり。それでね、びっくりしてこんな時期に転校してきたんだる、つて話になつたの」

確かに言われてみれば今は5月の半ば。新学期から1ヶ月以上も過ぎている。

新学期の訪れと一緒に転校してこなかつたところでは、何らかの事情があつたのだということくらい想像に難くない。

だがそれは、俺達が立ち入つていい事情なのだろうか。

興味本位であれこれ話しているクラスメイトの姿を想像すると、少し不快感を覚えてしまう。

「あつ、別にそんな悪い意味でじゃなくて、ちょっとだけ不思議に思つただけで……その……」

そんな俺の表情を読み取つたのか、佳歩はじどりもどりになりながら弁明をしようとする。

それを見て、自分が少し敏感になり過ぎていたと反省し、俺は素直に頭を下げた。

「こつちこそ悪い。そういう紹介の時もその辺りの話は一切なかつたもんな」

こつちこそ悪い。そういう勝手な噂話をするとなんだか陰口を叩いているようない気はしないが、俺自身も彼女が転校してきた理由については興味がない訳でもない。

なのでこの話は打ち切らず、そのまま続けることにした。

「うん。それで思つたんだけど、もしかして穂群川さん、前の学校で嫌なことがあつたんじゃないかなって……」

「嫌なこと……？」

そう訊き返すと、佳歩は少し躊躇つてから、呟く様に小さな声で答える。

「例えば……クラスでいじめにあつてたとか……」

「まさか……」

と、口では否定したものの、佳歩の推論にはどこか説得力があつた。

朝のホームルームでのことを思い返してみれば、まず彼女を「冷たい女」と誰もが思い、かと思えばその素直さとのギャップから一躍男子のアイドルへと登りつめた。

もし、これと同じ状況が前の学校でも起こっていたとしたら……いや、もしくは誤解されたままだとしたら……それは少なくとも一部の人間から格好の的として認識されるはずだ。

しかも本人は口下手で、あの高校生離れした美貌である。クラスから浮いていたであろうことは容易に想像できる。

「それマジかよ…………はあ…………」
ため息を一つ吐き出し、俺は額に手を当てる。

高校生にもなつてそんなことを思つてゐる奴を考えると、もはや怒りを通り越して呆れさえ感じてしまう。

いや、思春期の真っ只中にある高校生だからこそ、男子達にちやほやされる花に嫉妬してしまうのだろう。

もしかしたら将来社会に出ても「こんなことかどこにでもあるのが当たり前のかもしない。そう思うと少し憂鬱だ。

「ながら生れだしの方でも注意してみると何とかなるかも知れない。」

「言わなくてもそうするさ。それが友達って奴だろ」
そして改めて、佳歩の面倒見の良さというものを思い

両親が死んだあの時も、腐りそうになつていた俺を励まし、一緒にいたいとおっしゃった。

最初は余計なおせつかいだと思っていたが、その支えがあったからこそ今の俺がここにいることだけは疑いようもない。

最初は余詮なおせにかいだと思っていたが、その支
らっこ今の俺がここにいることだけは疑いようもない。

だからもし、穂群川さんが辛い目に遭うことがあるのなら、彼女の力になつてあげるのが無二の友人から教わつた、本当の友情と言うものなのだ。

「あー、お腹減ったなー。今日の晩ご飯はステーキとパインサラダだっけ？」

そんな俺の言葉を聞いて安心したのか、佳歩が真面目な表情から一転、いつものハラペコモードに戻っていた。

「お前なあ……さつき散々ドーナツ食つただろうが。といふか、よく朝のそんな妄言覚えてたな」

「甘いものごとご飯は別腹。これ女の子の常識だよ？」

「だとしても佳歩の食欲は常軌を逸してるよ。まったく……パインサラダは作り方知らないから普通のサラダでもいいか？」

「うん！」

「よし、じゃあスーパーにでも寄つてくれか」

それに今日の所は佳歩には色々世話になつた氣がする。さつきの会話のことだつて、話題にされなければ気にしてもいなかつた。

たまには夕飯を『ご馳走するくらいのことでもしないと、彼女の借り放しのモノがいつまで経つても返せそうもない。そう思いながら、今日の献立をあれこれ考えていた。

そして他に何か食べたいものはないか、それを訊こうと隣を見た時、俺はやつと隣に佳歩がいないことに気付いた。

どうせまたおいしそうな店でも見つけて立ち止まつているのだろう、そう軽い気持ちで後ろを振り返り、声をかける。

「おーい、また何かみつけ……」

そこに佳歩はいた。

だがいつも彼女とは大きく『何か』が異なつていて。

それは余りにも難度の低い間違探しだ。だがそれにも関わらず、俺がその『間違い』に気付くのは数秒か十数秒か数分か、とにかく体感的に長い時間要した。

いや違うな。単に俺はその『間違い』を信じられないのだ。とにかくその『間違い』は認識している。ただ認めたくないだけなのだ。ああ……どうして……どうしてそんなモノが、佳歩の体から突き出でているんだ！

ソレはじつ見たつてヒトを殺す為に作られたモノじやないか！
金持ちの家に飾つてある刃のないソレとは違う、本物の刃を持つ
た凶器。

刀、日本刀、打刀、太刀……呼び方は何でもいい。なんでそんなモノが、佳歩の体を貫いているんだよおおおおおおおお！？

「カズ、くん……はや……く……」

一か月ぐんはせぐ

虚ろな瞳をした佳歩がこちらに手を伸ばす。

ああ、わかつてゐた。早く助けてやる！

くせつ、それだつてのござひつてわつから体が震えて動ひつと

しないんだ！

その間にも佳歩の細い体から、信じられない量の赤い液体がドクドクと流れ出している。

口元からも同じ赤い液体を漏らしながら、何かを伝えようと口をパクパクと動かすが、その声は今にも消えそうな程にか細い。その赤い液体が何なのか、もはや確認するまでもない。生物にと

つて最も重要な液体……血液だ。

それがあんなに流れてしまつたり、どうなつてしまつのか。
あちらこかかつていゐや。『うか、うか、動カ！ 動く、うか！

俺は絶叫をあげた。口の動けようとしない体に渴を入れ、恐怖を少しあもーくおう。

しても遅いね。」と

震えは止まつた。体も動く。よし、いけるぞ。

俺は走る。佳歩へ向けて一直線に。

その命の灯を絶やさないために

そして

佳歩を貫いていた刃が、炎に包まれる。

その時になつて俺はよつやく事態を理解した。

「カズくん……！ はやく……逃げて……！」

炎の刃が横に薙がれ、佳歩がその場に倒れ伏した。

そう、彼女は助けを求めていたんじゃない。俺に逃げろと言い続けていたんだ。

佳歩の腹部からはおびただしい量の血液が流れ出しあスファルトを赤黒く染め、更に切断面からは人体に収まっているべき内臓が剥き出しになつてている。

目を背けたくなるような状況。だがこれが現実であった。

「おい、佳歩！ しつかりしろ！」

倒れている佳歩に近寄り、その体を抱き寄せた。

こんなにも人の体温というのは冷たかつたのか。そう思える程、佳歩の体からは急速に体温が失われ、顔も青ざめている。

「カズ……ん……にげ……」

しかし朦朧としているが意識はある。すぐに病院へ連れて行けば助かるかもしれない。

「待つてろ、すぐに救急車を……」

などと、目の前で起きた惨劇に気が動転していた俺は彼女を助けること以外何も考えていなかつた。

だから、その存在のことを今の今まで完全に失念していた。

佳歩の瞳が俺ではなく、別の誰かを見ていることに気付くまでは

「……！」

嫌な予感がして、俺はとつさに佳歩から手を離して後ろへ飛びの

いた。

その刹那、首の辺りにかすかな違和感と痛みを覚え、赤い霧が佳歩に飛び散る。

そして首筋に焼けるような痛みと……

「ありや、気付かれちゃったか」

刃が向けられた方から聞き覚えのない女の声がした。

どうして俺は今まで、こんな当たり前のことを気付かなかつたのだろうか。

佳歩が刀で斬られたのなら、それを行つた第三者がいるのは当たリ前のことだ。

田の前で幼馴染みが血を出して倒れたショックに気が動転していたとはいえ、余りにも間抜け過ぎる。

「せつからく苦しまないよう一撃で殺してあげよつと思つてたのに、その傷じじゃしばらく苦しむよ、キリ」

呼びかけられ、俺は恐る恐るその方向に視線を向けた。

その女は俺達と同じ天ノ原高校の制服に身を包み、その上からパーカーのような物を着て顔を隠している。

声からすると年の頃は俺達と同じか、少し低いくらい。女と云うよりは少女と言つた方がしつくりくるだひつ。

ただそのパーカーの裾から黒い髪がなびき、相当長い髪だということだけは判別できる。

そしてもう一つ。日本刀に炎の異常能力者という符合……すまない佳歩。さつきの忠告はどうやら聞けそうもない。

「お前がニースでやつてた殺人魔か」

「あつたりー。だつたら、ほら。早く逃げないと殺されちやつよー

？」

「へつ、誰が逃げるかよ……」

毒づきながら俺は立ち上がる。

こいつが異常能力者というならば、なおさら俺は逃げる訳にはいかない。

それにどうせ逃げたところで、ただの高校生である俺では「コイツから逃げることすらままならない。

それなら俺にやるべきことは一つしか残されていない。

俺は決意を固めた拳を握つて、それをフード女へと向ける。

「へー、やる気なんだ？」

「どうせ逃げたって能力者とただの人間じゃ結果は見えてる。だつたらアンタを倒すのに全力を出した方が勝ち目はあるからな」

「倒す？ ハハハハハハッ！ 何、主人公でも気取つてるつもり？」

「ああ、そうさ。俺自身の物語は、いつでも俺が主人公だからな」

「フーン、だつたら教えてあげるよ。能力者とパンピーの差つてものを！」

そう言つて少女は指についた血をペロリと一舐めする。

と、次の瞬間、俺の眼前から忽然とその姿は消えていた。

いや、消えるという表現は適切ではないだろう。

ただ俺の目では動きについていけないだけなのだ

これが異常能力者と、そうでない者の差。

身体能力、動体視力、戦闘力、どれ一つ取つても絶望的な差でしかない。

だが、それでも俺は逃げ出す訳にはいかなかつた。

ここで逃げれば少なくとも佳歩は助からない。

それに見殺しにした俺自身を許すこともできない。

両親の時のように誰かを失つて後悔するのはもうたくさんだ。

だから足掻いてやる。精一杯足掻いてやる。たとえ勝てない相手

であろうと、たとえ俺自身が殺されようと……！

「でもキミの物語はここでお終い。じゃあね」

少女の放つた一閃が……俺の命を奪う一太刀が、眼前に迫つて来ていた

to be continued

#01 EZCOUNTER (後書き)

この作品は電子書籍「ももこと。」で連載中の小説です。
バックナンバーのみの公開となりますので、続編はももこと。v0

1・3が配信された後となります。

早く続きを読みたいという方はももこと。公式サイトよりv01・
2をダウンロードしてみてください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4599o/>

フェンリルの鎖

2010年10月23日13時10分発行